

## 帰りのバスの中で、参加者から以下の感想や貴重なご意見をお聞きすることができました

- ◆ 東北、六ヶ所や福島を写してきた。被災地も気仙沼など回った。今回はいろいろ新しい発見をした。語り部の話も聞いた。原発事故がよく分からなかったの、指示どおり自宅にいたが、原発に出入りしていた知り合いからすごく危ないと聞いてから逃げたとのこと。新しく出てきたペロプスカイトはすごい。自然エネルギーでいける。
- ◆ 初参加。新しい発見ばかり。来年も参加したい。
- ◆ 事故から3年後に富岡町へ来たことがある。今は街がきれいになっているが、まだ放射線は高い。東電の資料館に行った時に原発は安全だと説明されたが、原子炉の5重の壁が崩れたのが分かった。初参加、議員にいろいろな人がいることが分かった。一生懸命な人もいる、頑張ってください。
- ◆ 地元で放射線の測定をしている。復興は国がお金をばらまいても人が戻らないこと。矛盾を感じた。フレコンパックはどこに行ったのか、子どもが減っていく「小中学校」はどうなるのか疑問残る。
- ◆ 福島は変わった。豊島区に線量計は2台ある。よく借りて計っている。豊島区は0.03から0.06くらい。浪江町津島地区では1.8くらいもあって驚いた。
- ◆ 復興資金が気になる。有効にお金を使ってほしいし、そこに住む人のためになる使い方してほしい。伝承館は3回目。人災の部分と天災の部分がいまにされているのが気になる。
- ◆ ①菅野さんの話。復興とは何か？なんのための復興予算か。②フレコンパックはなくなったが、線量計が鳴り続けた。伝承館は誤魔化し、津波で電源喪失して放射能が出たと書いてある。福島の事故の真実を覆い隠すもの。イノベーションコースト構想は危ない。③原発事故の時に市議だったので、平時から放射能測定すべきと実施してきたが、10年たって今は止めた。しつこくやらねばと思った。
- ◆ 建物に興味がある。「道の駅なみえ」は隈研吾さんの設計とか、道の駅が次々と何百億円、何十億円と建設されている。復興の名を借りたただの開発行為。施設の建設に町の人の参加が全く見えてこない。伝承館は最後のまとめが良くなかった。
- ◆ 4回目の参加。毎回、成果を消費生活展で発表。メガソーラーも風力も、反対している人もいることを知ったが、電気も地産地消がいいと思う。
- ◆ 3・11後に、チェルノブイリに視察に行った。線量計がピーピー鳴りっぱなしで住んではいけない所だと感じた。福島もピーピーなって同じだと感じた。風力発電も、第二の原発であるとの話。岡山でも大反対が起こっている。伝承館には事実も。白井市も放射能除染土をまだもってるが先は長いと思う。
- ◆ 東海第二の集会チラシを配らせてもらった。原発はいらない。まだまだ始まりと思う。最高裁で苦労している人もいるし皆さんのご活躍が勉強になる。
- ◆ 伝承館で、説明員の人と話した。元警察官で、原発事故の時はタイベックス服を着て原発に行ったが、暴力団関係の人もいたとの話。
- ◆ 10年前にも福島に来たがフレコンバックの山だっ

た。通行止めも。請戸も様変わりしていて驚いた。請戸に原発のテントを建て、魚を釣って放射能測定をしている人達がある。静岡に行ったら、リニアには大量の電気が必要だと言っていた。原発推進派の考え方が不思議。

◆ 人口が減って、財政もこじんまり。どうやって財政を維持するか、苦渋の選択かもしれない。先祖代々の土地をめっちゃくちゃにするのだから、復旧ではない。新たな形を創るしかないが、イノベーション構想は国主導だ。「地産地消」というが、東京は圧倒的に不足している。東京に売るのはやむを得ないかも。太陽光は売れると思う。利益誘導ばかりではないし、努力している人もいると思う。

◆ ①今朝の飯館での話、金満体質だと思った。地方交付税が減るから云々の話におどろいた。原発の議員に話を頼んでいると思うが気になった。②ホリバ測定器で計測してきた。機器とそれに伴う費用を東電に賠償請求して勝ち取った。③新座にアーティスト呼ぶ。双葉の人で避難先が新座。高校でいじめられて部活で一人琴を弾いていたと聞いて、せめて今加須市にいる大川よしあきさんをぜひ呼んで。④来年は「俺たちの伝承館」へ行ってほしい。

◆ 今日の「伝承館」は企業のもので鎮魂の情は無い。牛小屋に閉じ込められ白骨化した牛の像などの展示。一度は行くべき。

◆ 初参加。別の福島ツアーには5回ほど。これまでと違って。ゼネコンがどれだけ儲けているのか。伝承館に若い人がいたがどう感じたか？孫を連れて行きたい。

◆ 伝承館の展示は昨年10月の時とは変わっていた。イノベーション構想は昨年はなかった。オフサイドセンターのホワイトボードが5台あり、帰還困難区域の看板もたくさんあった。見たことのないものが見られた。伝承館の展示には注意払う。「伝承館」は原発ではないが国だから集められる資料もある。

【投稿】今回5年振りの開催ということで、新人議員の私は初めて参加しました。福島第一原発の事故以来、初の福島でした。地元の各自治体の方からご報告を頂きました。現在福島は若い方の甲状腺癌が増えていると聞きます。「普段やらない若者向けの検査をやっているからだ。全国平均と変わらない」という意見も聞きます。本当はどうか、疑問をぶつけました。「実際甲状腺癌が増加しても、国は認めない」とお答え頂きました。成る程。仮に増加しても、責任を、因果関係を認めないと。長い道のりの様です。バスで帰宅困難区域を通過しました。参加者の皆さんガイガーカウンターをお持ちで、ピーピーと一斉に鳴りました。不思議なもので、トンネルに入ると止み、トンネルを出るとまた鳴ります。ある程度進むと、作業服を着たお二人が道端で何か喋っていました。ガイガーカウンターはまだ鳴っており、作業されている方の健康が心配です。

れいわ新選組 中野区議会議員 井関源二

## 原発やめようニュース 反原発自治体議員・市民連盟

NO. 50 2024年9月  
特別号

### 反原発自治体議員・市民連盟

共同代表 佐藤英行（岩内町議会議員）  
福士敬子（元東京都議会議員）  
武笠紀子（元松戸市議会議員）  
野口英一郎（鹿児島市議会議員）

〒168-0072  
東京都杉並区高井戸東3-36-14-301  
Tel/Fax 03-3317-0356  
郵便振替 00110-7-449067

## 第8回福島を忘れないシンポジウム・現地視察 報告集

7月7日-8日、第8回福島を忘れないシンポジウムと現地視察を5年ぶりに再開しました。新宿からの大型バス1台往復と、新幹線で直行参加の方、現地からの参加含め約50名。原発事故で被害を受けた自治体の議員からそれぞれの現状をお聞きしました。「復興」の掛け声とは異なり、故郷に戻れない方がほとんどであることや、戻ったご高齢の方々も医療や介護に事欠き、くらしが成り立たない厳しい実態を学びました。改めて福島を忘れず、後世に、全国に、語り継ぎ拓げる責任を確認しました。



### 現場からの報告 1



菅野清一 川俣町議会議員

福島第1原発は、東芝・日立が建設しました。1・2号機は燃料がまだ残っています。3・4号機は取り出しました。

原発事故により、最大約16万4000人が強制避難させられたが、13年経った現在も2万6277人が避難中であり、実質8万人は戻っていません。川俣町山木屋地区は国直轄の除染であり、大成・鉄建・西武などの大手ゼネコンJVが受注し、除染費用は450億円です。川俣町は、大成建設を中心に地元業者とのJVで受注し費用は450億円でした。

避難指示区域の解除の3要件が、国の方針として示されました。①空間線量が年間20ミリシーベルト以下になること、②電気・ガス・上下水道や交通・通信などのインフラ整備と医療・介護・郵便等の生活関連サービスの復旧。③県・

市町村・住民との十分な協議。これは約束事だったはずですが、現実はそうっていない。

2017年3月31日に避難指示が解除され、復興事業が始まりました。復興拠点とんやの郷建設、小中一貫校改築、災害公営住宅整備、水田用排水路整備、メガソーラー事業など、総事業費149億1000万円の復興事業が進められました。現在の山木屋小中学校には中学生4人が在籍していますが、地元山木屋地区の生徒はいません。教員は15名が配置されています。小学生・幼稚園児はいません。区内人口は現在250名です。子どもがいないということは、その地域の後継者がいないということです。

川俣町には、25基の風力発電整備計画があります。住民の反対運動で、建設計画をストップさせた兵庫県新温泉町を議会委員会で視察し、意見交換をしてきました。

福島県では、カーボンニュートラルをチャン

スと捉えた金儲けで、風力発電、メガソーラー建設が進んでいます。福島市でも、景観や環境破壊になるとして、見直しを求める住民運動が広がっています。



水素爆発（伝承館の展示から）

### 現場からの報告2



**横山秀人** 飯舘村議会議員

飯舘村の職員をしていましたが、2021年から議員になりました。

2011年4月22日、全村民6500人に避難指示が出されました。6年後2017年3月31日、村内20行政区のうち、19の行政区で避難指示が解除されました。

2023年5月1日に、残りの1行政区の避難指示が解除されました。2024年7月1日の避難情報は、村内居住者は33%（1513人・804世帯）であり、村外居住者は67%（3068人・1288世帯）となっています。原発事故前は、6509人でした。1925人、30%の減少となっています。現在も福島市に1926人、761世帯が避難しています。このような状況は自治体と言えるのか、復興していると言えるのか、疑問に思っています。

2016年に実施した住民意向調査では、帰還する場合に希望する行政支援では、医療・介護福祉施設の充実が59、4%を占めていました。しかし現在、クリニックの診療日は週2日のみ。デイサービス・訪問介護は事業休止中であり、村外のデイサービスに通わざるを得ない状況です。議会質問では、「サービスが戻らないのは、戻ってきている人が少ないから」との答弁です。

郵便局数も商店数も減少し、買い物が不便になっています。村は平成29年（2017年）から住民の意向調査を実施していません。客観的数値を基にした政策を実施するためには、定期的な住民意向調査が必要であり、実施するよう提案しています。

### 現場からの報告3



**松本静男** 葛尾村議会議員

葛尾村は、2023年4月に、村政100年を迎えました。私は村職員として42年、議員として12年、54年を行政に関わり村の姿をみています。

震災当時の人口は1546人でしたが、現在は1248人となっています。その内、帰村者数は317人であり、帰村率は29、7%です。避難指示解除後の転入者は172人であり、その内、村内居住者は147人、居住率は37、5%にとどまり、今後増加の見通しはないと考えています。

復興に向けた取り組みは、2016年4月に村役場が葛尾で再開し、翌年6月に幼稚園・小中学校が再開しました。歯科診療所、葛尾診療所、路線バス、店舗などが順次、再開しました。

原発事故による避難当時、葛尾村とは別の自治体である三春町に土地を購入して、復興住宅を建設しました。本来、村内に復興住宅を作るべきでした。この方針には反対しましたが、この失敗がその後も復興の足かせになっています。今日まで多額の税金を投入し、定住化促進住宅、胡蝶蘭栽培施設、小中学校体育館やプール、葛尾復興交流館、米乾燥調整施設など、多数の復旧事業やインフラ整備を行ってきましたが、住民が望んだものばかりではありません。本来は地元の人が地元の事を一番分かっているということですが、職員の半分以上は地元の方ではありません。今後、民間企業や東北電力による風力発電が、合計46基建設される計画があります。2026年から、被災者住民の医療免除がなくなります。介護保険料も3年後にどうなるかわかりません。



田畑には、除染土のフレコンパックにかわりソーラーパネルが

### 現場からの報告4



**佐々木茂** 浪江町議会議員

私は、（帰還困難区域である）津島地区で生まれました。浪江町は23200ヘクタールで、川俣町や飯舘村より小さい自治体です。

原発事故前は、人口22000人でした。現在、住民基本台帳では14800人ですが、現実に住んでいる人口は5月末調べで2200人で、半数が（企業進出などにより）新たに入ってきた人口です。今後、8000人の人口を目指しています。

原発事故後の状況は、他の自治体と同じような状況です。現在は、診療所が2ヶ所あります。委託料は、年間3000万円です。医療機関や高齢者施設がなく、デイサービスの必要を提案しますが、「人がいない」との答弁になります。行政に、やる気が無いんだと感じます。

町内にある家屋を解体すると、浪江町に帰ることが困難（帰る家なくなる）になります。行政に避難計画がなかったことが、明らかになっています。

福島県では、只見水力発電で東京に電気を送り、高度成長期を支えてきました。次に、原発建設が始まりました。私が小学6年の時でした。当時、町民の4分の1は出稼ぎでしたが、原発が建設されれば、良い町になる、人も来る、企業も来ると聞かされてきました。しかし、原発事故で、追い出されるように町を出された。皆さんは、「どこで電気が作られてきたか、作られているか」、都市の若者に教えてください。



伝承館には原発を推進する当時の写真が掲示されています

### 現場からの報告5



**木幡ますみ** 大熊町議会議員

2015年に、復興住宅ができました。私は、大熊町の再生賃貸住宅に住んでいます。上川地区に災害住宅ができ、100人が住んでいます。今は家賃が安いです。

高齢者が大半です。町内は、除染がまだ十分になされていないので、学校の裏や駅の近くなど、放射線量の高い場所があります。「理想の教育をする」と言って学校ができましたが、集団に馴染めなかった子どもが多く、障害児教育を身につけた教員でなければ、対応が難しいと思うが、現状はそうではありません。

大熊町では、原発事故で第1次産業ができなくなりました。仕事なくなったということです。これまで働いていた人たちは、身の置き場がなくなりました。これは、中・高年の男性に多い。若い人は仕事が見つかりますし、女性は比較的元気で、交流があります。

大熊町には、中間貯蔵施設があります。第1原発の廃炉とは、デブリを取り出したら廃炉なのか、そのデブリはどこに持っていくのか、決まっていません。大熊町・双葉町・富岡町には、家族が原発で働いていた人が多いので、専門的知識を持っている人が多いです。国の説明会があっても、国の役人より詳しく、国が対応に困っている状況でした。

大熊町は、原発の廃炉とともに生きねばならないし、廃炉作業も見続けていかねばならないと思っています。



新設の請戸漁港には多くの船が停泊していました